



国宝・大浦天主堂

長崎巡礼⑥

狭い石畳の坂道の両側にはカステラなどの土産店が並ぶ。車は通らない。狭い道路が人と人との距離を狭め、

東洋と西洋が入り交じり、ここだけの独特な雰囲気を出し出す。大浦天主堂への坂道は最も長崎らしさを感じさせる

ところである。長崎を最初に訪れたのは中学三年の修学旅行だった。茶色くなつた平和公園の平和祈念像前のクラススの全体写真がアルバムを飾っている。長崎市内には路面電



国宝の大浦天主堂

巡礼の道

藤屋 侃士 (下松市幸ヶ丘)

249

車が走っている。大浦天主堂は駅近くの西坂の二十六聖人殉教地からはかなり離れており「西浜町」で電車を乗り換え「大浦天主堂下」で降りて歩く。天主堂は二十六聖人に捧げられたもので、殉教地に向かつて建っている。二百五十年続いた鎖

国政策が改められ、外国人居留地には禁教令は廃止されないものの教会を建てるのが認められた。一八六五年にパリ外国宣教会によって建てられた大浦天主堂は当時「フランス寺」と呼ばれた。正面入り口の上には「天主堂」と書かれている。これは責任者のプチジャン神父が、禁教令が廃止された時、江戸時代のキリスト教を知る人々が、当時の教会と同じものだと思われるようにあえて「天主堂」と表記させたという。

完成から一カ月後、プチジャン神父のもとに浦上の農民の婦人たちが訪れ「ここにおります私どもは全部あなた様と同じ心でござい

ます。サンタ・マリアの御像はどこ？」と言った。世界宗教史上、奇跡とまで言われる、二百五十年の沈黙を破った「信徒発見」の瞬間である。このことを想像するだけで私の心は躍る。教会もなく、一人の司祭も存在しなかつたにもかかわらず、信徒だけで信仰を守り続けていたのだ。急な勾配の階段を上ると天主堂がある。正面入り口前の白いマリア像、これは「信徒発見のマリア像」ではなく、信徒発見を祝ってフランスから贈られたもので、台座には「日本之聖母・信徒発見記念」とある。死滅したものと想われていた日本のキリスト教の信徒発見のニュースは当時のヨーロッパに大きな喜びと興奮を与えたという。

聖堂横には四階建ての日本人司祭を養成する神学校も建てられた。パリ外国宣教会だけでは足りない、日本にキリスト教を伝えたイエズス会もカトリック大学（上智大学）を建て

るために再来日したのをはじめ、ヨーロッパの各修道会が日本に宣教師を派遣した。奇跡の信徒発見の日本に対する期待の大きさと比べてよいだろう。しかしそれが実を結んだかどうかはわからない。現在、日本の信徒数は国民の1%にも満たない。



二十六聖殉教者が描かれた油絵